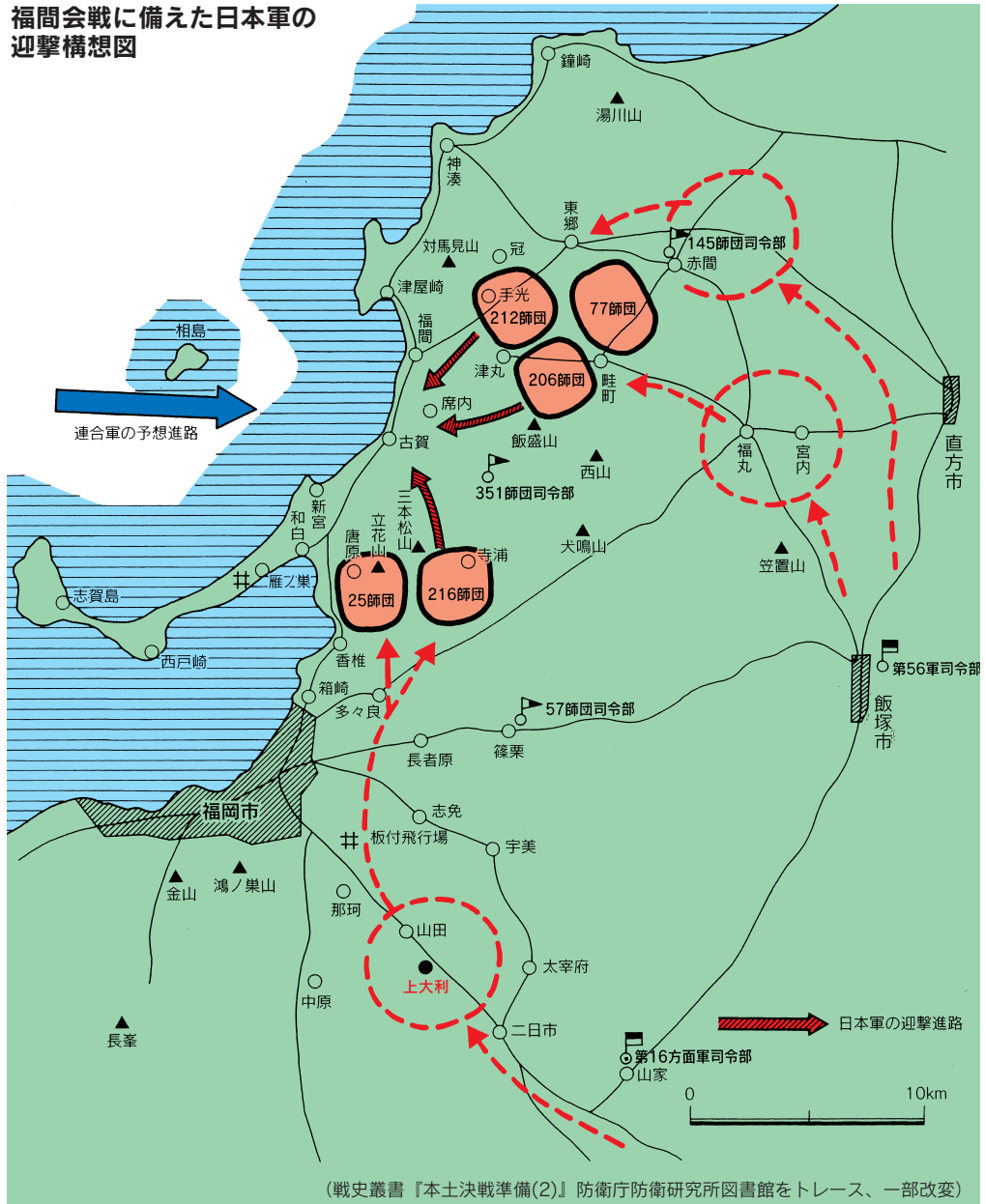
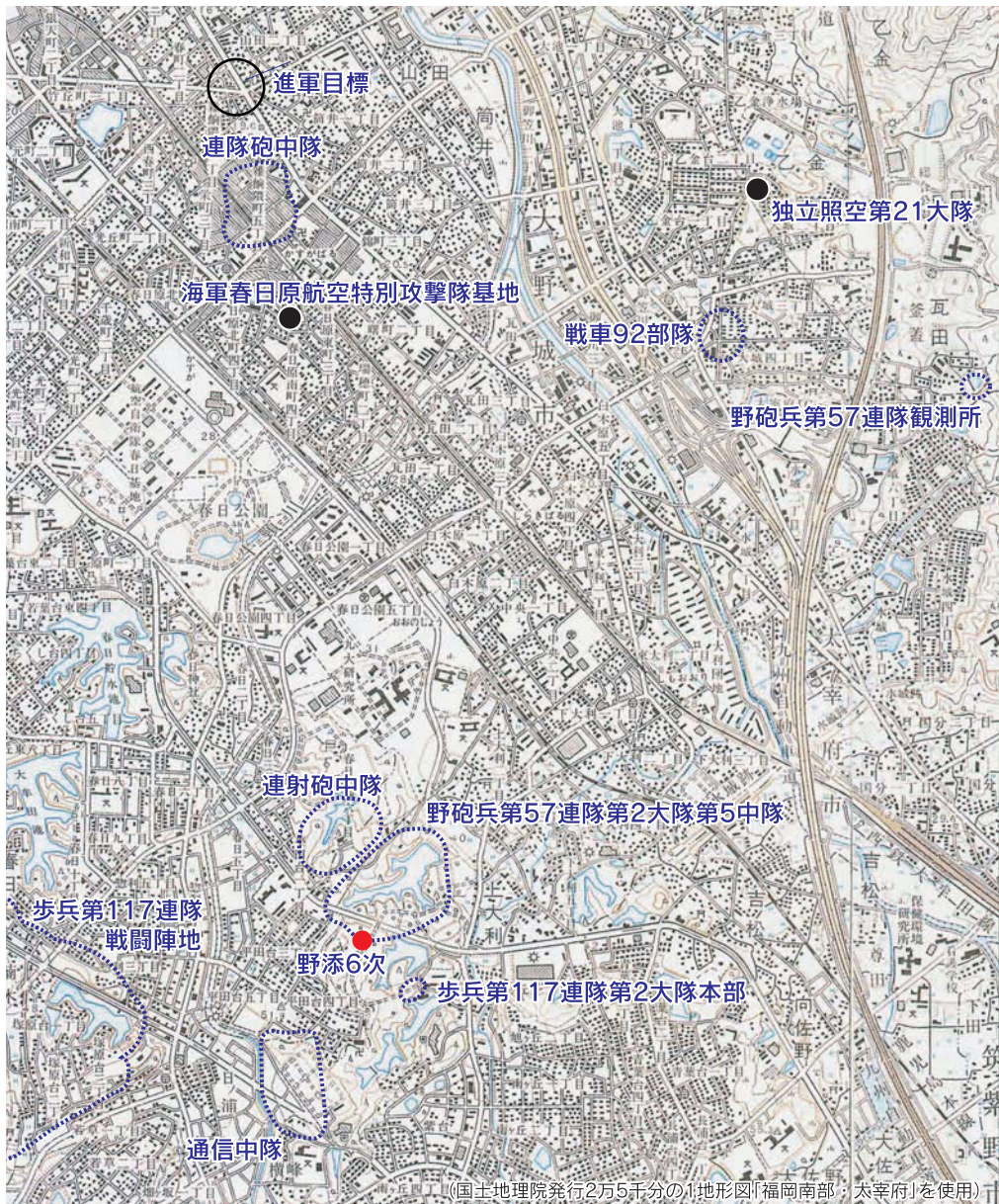


IV. 太平洋戦争と上大利 (野添遺跡 6次調査)

福岡会戦に備えた日本軍の迎撃構想図



本土決戦と上大利 たいへいようせんそう 太平洋戦争末期、日本軍は連合軍の上陸に備えて準備を始めました。ほんど本土決戦と呼ばれます。北部九州では福岡海岸に上陸すると想定され、計画が立てられました。計画では、大野城市の上大利や山田は進軍目標となり、上陸した場合にはここから立花山付近へ



大野城市とその周辺に配置された部隊 (S=1/30,000、点線は推定)

と決戦に向かうことになっていました。

大野城市に配置された軍隊 北部九州には、昭和20年4月から本土決戦の兵備増強のために（へいびぞうきょうのため）満州（中国東北部）から第57師団が転用されました。第57師団は篠栗町に司令部を置き、（まんしゅう）指揮下にある部隊を各地に配置して、連合軍が上陸した場合に備えて陣地の構築を行いました。大野城市内やその周辺にも多くの部隊が配置されています。大野城市に配置された部隊のうち



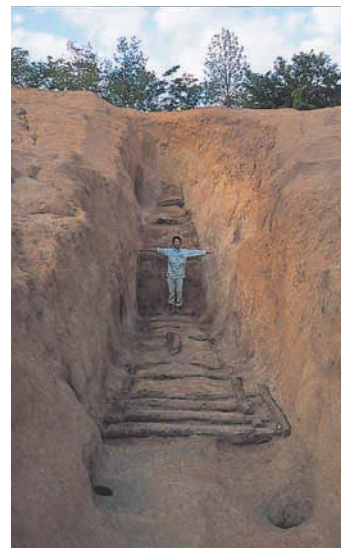
6次調査洞窟壕

主なものでは、歩兵第117連隊・野砲兵第57連隊・独立照空第21大隊・戦車92部隊があります。

このうち歩兵第117連隊は、秋田で編成された隊で、第2大隊の本部が上大利字野添に置かれました。連隊の本部は、春日村（現在の春日市）春日から大野村（現在の大野城市）牛頸にまたがる丘陵地帯を戦闘陣地に選び、洞窟壕の築造など戦いの準備を行っていました。

野砲兵第57連隊は、釜蓋地区に観測所を作り、また、連隊のうち第2大隊の第5中隊が梅頭の三兼池周辺に兵舎をつくりました。三兼池周辺には洞窟壕を築造し、構築材には松を使用していたようです。

洞窟壕の発見！？ 6次調査は、平成15年5月から8月にかけて行われました。ここは、三兼池の南側、日ノ浦池の西側に位置しています。調査では、7世紀初めの灰原が見つかり、その下から洞窟壕と考えられる遺構が見つかっています。
大きさとつくり この遺構は、奥行きはわかっていませんが、高さは約3m、幅は約1.5～1.7mあり、人が楽に入れる大きさです。つくりはトンネルを掘る地下式構造と呼ばれるも



6次調査洞窟壕の大きさ



6次調査洞窟壕のつくり

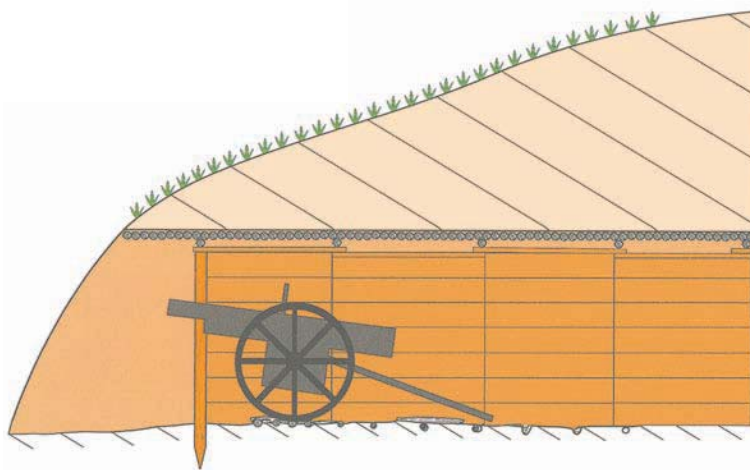
ので、横断面は砲弾形をしています。床にはアカマツの丸太を並べ、丸太の間に土を詰めることで、ほぼ水平になっています。入り口から約3mの所には穴があり、ここに丸太を立てて柱にしていたのでしょう。

どんなもの？ 上大利の人たちの話によると、太平洋戦争の末期、上大利周辺には日本軍が駐屯し、三兼池の周りがある山に横穴を掘り、中には野砲（移動が比較的に簡単な大砲）が据えられていたとのこと。また、南ヶ丘や旭ヶ丘に生えていた松を、秋田から来た兵隊さんが運んでいたという話もあります。これらのことから、この遺構は、太平洋戦争時に日本軍によって作られた洞窟壕だったと考えています。特に、秋田から来た歩兵第117連隊や、三兼池周辺の野砲兵第57連隊が、上大利での本土

決戦準備に深く関わっていたのでしょう。

これらの話を元にして、洞窟壕が作られた当時の想像図を作成しました。話を元としたため、中に野砲を描いていますが、6次調査で見つかった洞窟壕の形は、弾薬や食料の格納庫と言われているものと似ており、実際は違う使い方だったかもしれません。

太平洋戦争の終わり 昭和20年8月15日に終戦を迎え、本土決戦は行われず、大野城市に



6次調査洞窟壕想像図

(『牛頸野添遺跡群Ⅲ』大野城市教育委員会、『野戦築城教範』教育総監部を参照)

配置された軍隊も実際に戦うことはありませんでした。太平洋戦争では歴史の表舞台に登場せずに入った大野城市ですが、意外にも戦争の痕跡が残っているということを確認しつつ、今の平和に感謝したいと思います。

V. おわりに

上大利南土地区画整理事業地では古代の遺跡が残され、重要な調査が行われました。調査後、山を削り谷を埋めて新しく南大利という街が生まれつつあります。数多の歴史を経たこの土地は、将来どんな街へと発展していくのでしょうか。



平成 16 年 11 月事業地周辺 (区画整理中)

**大野城市の文化財
第39集**

平成19年3月31日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2丁目2番1号

印刷 井上紙工印刷株式会社
福岡県朝倉市持丸625-1

